

# フサイン朝チュニジアにおける ムスタファ1世ベイの統治期(1835-37年) ——オスマン帝国によるトリポリ直接統治とその影響——

桃 井 治 郎

**要旨** 19世紀前半のフサイン朝チュニジアは、イギリスやフランスなどからの経済開放の要求や西に隣接するアルジェリアへのフランス軍の侵攻などヨーロッパからの政治・経済・軍事的な圧力が強まっていた。さらに、ムスタファ1世ベイの統治期である1835年には、東に隣接するトリポリ州に対してオスマン帝国が艦隊を派遣し、カラマンリー朝を廃して直接統治に移行している。この出来事は、1830年のフランス軍によるアルジェリア侵攻に匹敵するような脅威をフサイン朝に与えることになった。

ムスタファ1世ベイは、オスマン帝国からの要求に基づいてトリポリのオスマン帝国軍に支援を行うが、本国に対する毎年の貢納については、オスマン帝国の影響力が強まることを懸念し、経済的理由を口実にその要求を拒んだ。これに対し、オスマン帝国は艦隊をチュニスに派遣することを計画する。しかしながら、オスマン帝国軍のチュニス上陸を懸念したフランスがこの事態に介入したため、オスマン帝国艦隊のチュニス来航は実施されなかった。ただし結果的には、チュニジアのフランスへの依存はさらに進むことになった。

一方、チュニジア内では、軍事力の増強を目指して常備軍の拡充が図られたものの、新たな徴兵方式をめぐる混乱が生じた。また、この時期には、ベイ側近のシャーキル・サーヒブ・アッタービアが反乱の企てによって処刑された。

ムスタファ1世ベイの統治期は、2年という短い期間であったが、トリポリにおけるオスマン帝国の直接統治という事態に直面し、チュニジアの生き残りが模索された時期であった。オスマン帝国からの独立を維持するため、フランスへの依存が強まるとともに、チュニジア内では軍事力の増強が図られ、次のアフマド・ベイの時代の改革へとつながっていく。

キーワード：19世紀、チュニジア、フランス

## The Reign of Mustafa I Bey in Tunisia (1835-37): The Ottoman Empire's Direct Rule over Tripoli and Its Impact

MOMOI Jiro

**Abstract** In the first half of the 19th century Husainid Tunisia was under increasing political, economic, and military pressure from Europe, including demands of Britain and France for economic liberalization and the French invasion of Algeria. Furthermore, in 1835, during the reign of Mustafa I Bey, the Ottoman Empire dispatched a fleet against Tripoli, abolishing the Karamanli dynasty and establishing a direct rule. This event posed a threat to the Husainid dynasty comparable to that of the French invasion of Algeria in 1830.

Mustafa I Bey provided support to the Ottoman army in Tripoli at Ottoman request but, fearing the growing influence of the Ottoman Empire, refused to make annual tribute payments, using economic difficulties as a reason. In response, the Ottomans planned to dispatch a fleet to Tunis. However, France, concerned about the landing of Ottoman troops in Tunisia, intervened and the Ottoman fleet was not sent. As a result, however, Tunisia became more dependent on France.

Meanwhile, within Tunisia, the standing army was expanded to increase military strength, but there was confusion over the new conscription system. It was also during this period that Shakir Sahib al-Tabi', a member of the Bey's entourage, was executed for attempting revolt.

The reign of Mustafa I Bey was short, lasting only two years, but it was a period in which Tunisia sought to safeguard its independence in the face of the Ottoman Empire's direct rule in Tripoli. To do so, however, Tunisia became increasingly dependent on France, while at the same time increasing its own military power, leading to reforms during the reign of Ahmad Bey.

**Key words:** 19th century, Tunisia, France

### はじめに

19世紀前半のフサイン朝チュニジアは、イギリスやフランスなどからの海賊廃絶や経済開放の要求、また、西に隣接するアルジェリアへのフランス軍の侵攻など、ヨーロッパからの政治・経済・軍事的な圧力に直面していた<sup>1)</sup>。

加えて、本稿が扱うムスタファ1世ベイの統治期には、東に隣接するトリポリ州に対してオスマン帝国が艦隊を派遣し、カラマンリー朝を廃して直接統治に移行している。フサイン朝チュニジアも、トリポリ州と同様に、オスマン帝

国の属州という性質を持つとともにフサイン家のベイが独自に統治するベイ領という性質を併せ持つ不安定な政体であった。それだけに、オスマン帝国によるカラマンリー朝の廃絶とトリポリ州の直接統治は、フランス軍によるアルジェリア侵攻に匹敵するような脅威をフサイン朝に与えることになった。

本稿では、オスマン帝国によるカラマンリー朝廃絶の経緯について概観した後、フサイン朝チュニジアがこの事態に対して、どのように対応したのかを見ていく。特に、この時代に宮廷の書記官を務め、後にこの時代についての歴史書を残したイブン・アビー・ディヤーフ<sup>2)</sup>の記述を用いながら<sup>3)</sup>、チュニジアの内在的な視点を踏まえてムスタファ1世ベイの統治期をたどっていきいたい<sup>4)</sup>。

## 1. ムスタファ1世ベイの即位

1835年5月21日、前任者で兄のフサイン2世ベイの逝去により、ムスタファ1世ベイが即位する。フサイン2世ベイにはムハンマドとムハンマド・アッサディークという二人の息子がいたが、チュニジアでは一族の中で年長者が継承する原則となっていたため、フサイン2世の弟で48歳のムスタファがフサイン朝第9代のベイとして即位した。

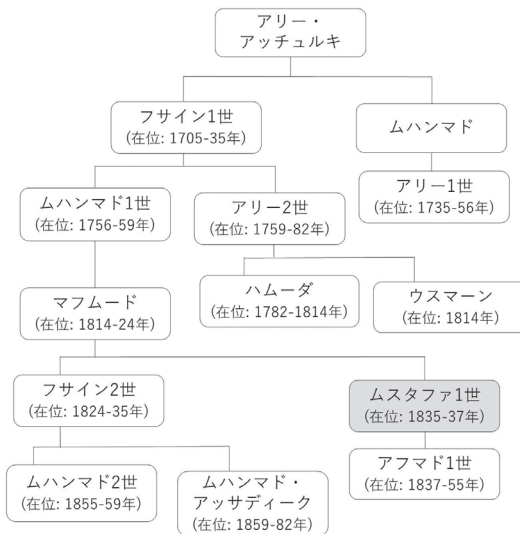


図1 フサイン朝系図

(フサイン1世ベイからムハンマド・アッサディーク・ベイまで)

なお、時代はさかのぼるが、1814年、ハムダ・ベイの死去時、年長者継承の原則が破られ、マフムードより年少のウスマーンがベイに即位した。これを不満としたマフムードは、ウスマーン・ベイの暗殺に手を染める。その後、マフムード・ベイの皇妃でフサインとムスタファの母は、フサイン家のなかで再び争いを起こさないため、二人の息子に対してお互いを尊重するように誓約を交わさせ、それ以来、フサインとムスタファは固い結束を維持するようになったという<sup>5)</sup>。

イブン・アビー・ディヤーフによると、ムスタファ1世ベイは、即位にあたって臣下たちに、「私は武力で権力を奪取しない。私の即位を決めるのは諸君らだ。私は自分を兄の代理人と考えている。諸君らは彼に仕え、フサイン家に仕えよ」<sup>6)</sup>と発言したという。このあとに見ていくムスタファ1世ベイの行動や発言を踏まえると、ムスタファは穏健な性格であったと推測できる。

ムスタファの即位後も、フサイン2世ベイの時代からの大臣や高官に大きな変更はなく、大臣でマムルーク官僚のシャーキル・サーヒブ・アッタービア<sup>7)</sup>が引き続き宮廷政治において中心的な役割を担うことになった。また、ムスタファ1世ベイは、慣例に従って、後継者である息子のアフマドを地方巡回軍（マハッラ）の司令官に任命した<sup>8)</sup>。

ムスタファは、オスマン帝国のスルタンからベイ即位の勅令を得るため、1835年7月、シャーキルをイスタンブルに派遣する。イスタンブルに到着したシャーキルは、海軍大臣のターヒル・パシャと面会する。なお、ターヒル・パシャは、1830年のフランス軍によるアルジェ侵攻時にオスマン帝国の使者としてアルジェに派遣された人物である。その時、ターヒル・パシャはチュニジアのフサイン2世ベイにチュニスへの上陸を求めたが、フサイン2世ベイはフランスとの関係悪化を懸念して上陸を拒否したという経緯があった<sup>9)</sup>。結局、ターヒル・パシャは職務を果たせぬままイスタンブルに戻り、その後、海軍大臣に就任していた。



図2 ムスタファ1世ベイ

(出典) El-Mokhtar Bey, *Les Beys de Tunis (1705-1957)*, Serviced, 2002.

イブン・アビー・ディヤーフによると、その時の経緯を根に持っていたターヒル・パシャは、ベイ即位の勅令の発布に関し、シャーキルが決裁権限を有さないような条件を課したという。シャーキルは、自分はスルタンへの贈り物を届け、勅令を得ることしか職務として与えられていないとし、ターヒル・パシャに対して慣例に則って勅令の発布を要望したという。他の高官への働き掛けも功を奏し、最終的には勅令は与えられ、11月24日、シャーキルはチュニスに帰任する。12月14日には、チュニスでムスタファ1世ベイの即位の祝典が開催された<sup>10)</sup>。

ただし、この時シャーキルは、オスマン帝国政府からムスタファ1世ベイへの書簡を預かっていた。書簡は、スルタンに対する毎年の貢納をチュニアに求めるといった内容であった。この要求に対し、ベイはフサイン家の王子や大臣らを招集して討議を行う。

書簡の内容がシャーキルから出席者に説明されると、大臣スライマーン・カヒヤはこの要求に対するベイ自身の見解を尋ねた。ベイは、オスマン帝国政府の要求を受け入れ、チュニアの財政に害をなさない範囲で毎年貢納を行うという意見を述べた。これに対し、息子のアフマドは、オスマン帝国への毎年の貢納はチュニアに打撃を与えるとしてベイの意見に反対した。他の出席者も、貢納反対というアフマドの意見に賛同する。ベイは、自らの考えは述べたが、貢納によってオスマン帝国の権力が増長するという懸念があるならば、チュニアに害をもたらすようなことは望まないとした。結局、ベイは、オスマン帝国政府に対して、チュニア経済の困窮を理由に貢納を行うことができない旨回答を送る<sup>11)</sup>。

なお、次に見るように、この時すでにオスマン帝国によるカラマンリー朝の廃絶とトリポリ直接統治への移行がなされていた。毎年の貢納という事実によってチュニアにおけるオスマン帝国の権威が増すことへの懸念は、このトリポリでの事態が背景にあったと考えられる。

## 2. カラマンリー朝の興亡

ここで、トリポリにおけるカラマンリー朝の歩みとオスマン帝国による直接統治の経緯を確認しておこう。

16世紀中葉までトリポリにはマルタ騎士団の根拠地が築かれていたが、1551年、シナン・パシャ率いるオスマン帝国艦隊によって征服され、トリポリ地域はオスマン帝国の属州となった。オスマン帝国本国からは総督が派遣され、その下でトリポリ州として統治された。1711年、総督のムハンマド・ハ

リル・アミスがイスタンブルに一時帰国している中、トルコ人と現地アラブ人の混血の騎馬隊長アフマド・カラマンリーがクーデタを起こす。アフマドはトルコ人士官300人を殺害し、翌年のオスマン帝国艦隊の来航も撃退してトリポリの支配を確立する。以後、カラマンリー家がトリポリ州の統治者としてベイの地位を世襲し、カラマンリー朝と呼ばれる。ただし、名目的にはチュニジアと同様、オスマン帝国の属州という状況に変わりはない<sup>12)</sup>。

カラマンリー朝は、アリー1世ベイの時代（1754-93年）に相反する二つの方策によって繁栄を迎える。ひとつが地中海での私掠行為や貢納の要求であり、もうひとつがユダヤ商人を通じたイタリアのリヴォルノやマルタなどとの貿易による利益であった<sup>13)</sup>。

その後、アリー1世ベイの後継者をめぐってカラマンリー家のなかで内紛が発生する。1795年、アリーの息子のユースフがベイの地位につき、政争に敗れたユースフの兄弟のアフマドはエジプトに逃亡した。1801年、今度は私掠行為をめぐってアメリカ合衆国との間でトリポリ戦争が勃発する。アメリカはユースフ・ベイの失脚を狙い、エジプトにいたアフマドを擁して東部からトリポリに進軍するが、最終的には外交交渉によって紛争は解決され、ユースフ・ベイの統治は保たれた<sup>14)</sup>。しかし、1819年10月、海賊行為の廃絶を求めてイギリス・フランス艦隊がトリポリに来航すると、ユースフ・ベイは廃絶に同意を与え、トリポリによる私掠活動は終焉した<sup>15)</sup>。

この後、私掠活動の廃絶に加えて、ベイによるマルタ貿易への介入がイギリスによって禁止されたことで、カラマンリー朝は財政的な危機に陥る。その代替としてユースフ・ベイが目を付けたのが、南部のサハラ交易の開発であった。すでに1811年には、南部のフェザーン地方に出兵し、サハラ交易の中心都市ムルズクに拠点を築いていた。さらに1819年、南部のボルヌ地方への出兵を計画するが、イギリスからの財政支援を得ることはできず、1825年、最終的にユースフは計画を断念した<sup>16)</sup>。

カラマンリー朝は、収入の縮小と南部地方への遠征費用を含めた出費の拡大に対応するため、1829年から1832年の間に7回硬貨を改鋳するなどしたが、状況は改善せず、ヨーロッパ商人への債務が膨らんでいった。1832年5月、イギリス艦隊がトリポリに来航し、その圧力の下でイギリスのワリングトン総領事は、ユースフにイギリス商人への債務の支払いを迫った。ユースフは資金をかき集めたが、債務総額には達せず、7月18日、総額の半分の支払いを申し出た。イギリス艦隊の司令官は、この申し出を受け入れず、即時の全額払いを要求する。ユースフは、それまで徴税を行っていなかった地方部族に対する臨時の課税を宣言するが、これに対し、7月26日、反乱が発生する。トリポリ近郊

のマンシア地区では、ユースフの孫であるムハンマド・カラマンリーが蜂起し、ベイの地位を要求した。8月12日、ユースフは事態を收拾するため退位し、息子のアリーを後継者に指名した。アリーとムハンマドは叔父と甥の関係であった<sup>17)</sup>。

なお、トリポリに対しては、イギリスのほか、フランスやムハンマド・アリーのエジプトも勢力拡大の野心を募らせていた。1829年9月以降、フランスは、北アフリカにおけるイギリスの権益拡大を阻止するため、アレクサンドリア駐在総領事ベルナルディーノ・ドロヴェッティの提案に基づき、ムハンマド・アリーがフランスの支援の下、アルジェリア、チュニジア、トリポリに進出して統治するという計画を構想していた。フランスの動きに気づいたイギリスからの強い反発に会い、ムハンマド・アリーが立場を翻したことで、最終的に計画は挫折する<sup>18)</sup>。結果的には、フランスは、1830年6月にアルジェリアに軍事侵攻し、チュニジアにおいてはフサイン2世ベイに、トリポリにおいてはユースフ・ベイに接近する。同年8月、フランスは、チュニジアおよびトリポリに艦船を派遣し、それぞれと条約を締結して関係を強化した<sup>19)</sup>。

一方、従来、トリポリにおいて優越的な影響力を行使してきたイギリスは、ユースフ・ベイとフランスの接近に危機感を強めていた。ワリントン総領事は、親フランス派と見なすユースフの排除を目指し、先の債権支払いの際に圧力をかけたほか、後継者のアリーの即位を認めず、むしろ反乱者側のムハンマドを支援した。これに対し、フランス総領事はアリーを支援し、両国は対立する。1833年、イギリスとフランスの政府間でトリポリ問題についての交渉が行われたが、結論には至らず、事態は膠着した<sup>20)</sup>。

他方、オスマン帝国は、当初、外交的な解決を目指していた。イギリスやフランスと対立することは得策ではなく、とはいえ、このままトリポリで混乱が続けば、フランスによるアルジェリア征服と同じような事態がトリポリでも引き起こる懸念があったからである。1833年8月、オスマン帝国の使者シャーキル・エフェンディがトリポリを来訪する。同使者は、反乱者に対してアリーをベイと認めるように説得するが、試みは実らなかった。9月、シャーキル・エフェンディはチュニジアに向かい、当時のフサイン2世ベイに対して、アリーを支援するためにトリポリに派兵するように要請した。1834年9月、シャーキル・エフェンディは、今度はアリーのベイ即位の勅令を携えてトリポリを再訪する。しかし、反乱者側はアリーのベイ即位の決定を承認せず、対立は継続した<sup>21)</sup>。

1835年5月20日、海軍大臣ターヒル・パシャ率いるオスマン帝国艦隊がトリポリに来航する。5月28日、ターヒル・パシャは、アリーを艦船に招くと、その場で拘束し、さらにカラマンリー家のメンバーを乗船させ、イスタンブル

に同行した。トリポリでは、オスマン帝国の部隊が展開し、艦隊に乗船していたナジブ・パシャが総督として着任した。こうして、18世紀初頭以来のカラマンリー朝は廃絶され、オスマン帝国による直接統治に移行した<sup>22)</sup>。

なお、イギリスやフランスにとっては、ライバル国によるトリポリ支配という最悪の事態が避けられたという点では、妥協的な結果であった。この後、反乱はオスマン帝国軍によって鎮圧され、ムハンマド・カラマンリーは絶命した<sup>23)</sup>。

### 3. チュニジアの対応

それでは、トリポリでの一連の事態に対し、フサイン朝チュニジアはどのような対応をとったのか、また、その後の影響はどのようなものだったのか見ていこう。

先に見た通り、1833年9月、オスマン帝国の使者シャーキル・エフェンディがチュニスを来訪し、トリポリの反乱を抑えるため、フサイン朝に派兵を要請していた。イブン・アビー・ディヤーフは、この時の使者の来訪は記述していないが、1834年6月、チュニス駐屯部隊長のサーリムが現地の状況確認のためにチュニジアの艦船でトリポリに赴いたことを記している。サーリムは、反乱軍によって包囲されたトリポリで、(退位の宣言をしていた)ユースフ・ベイと面会し、フサイン2世ベイ宛の親書を受け取った。ユースフ・ベイの親書は、カラマンリー家はフサイン家の助けによって成り立ち、われわれは恩義を受けてきたが<sup>24)</sup>、それが崩壊の危機にある今、フサイン家に再び援助をお願いしたいという内容であった<sup>25)</sup>。

フサイン2世ベイは会合を開催し、大臣らに意見を求めた。大臣スライマン・カヒヤやムハンマド・カヒヤは、反乱が広がっていく危険があるので事態が深刻になる前に介入すべきだと意見を述べる。これに対し、シャーキル・サーヒブ・アッタービアは、われわれ自身が揺らいでいる中で他所の困難を解決する余裕はないとして、介入に反対の意見を述べた。シャーキルの意見が大勢となり、ベイは援軍の要請は受諾しないことに決した。ただし、チュニジア南部のジェルバ島の商人から、トリポリ近郊のマンシア地区で反乱者側に船が抑留されているとの訴えを受け、ベイはサーリムを現地に再派遣する。その際、まずはユースフの元に赴くが、問題が解決されなければ、マンシア地区に赴き、船の返還を要求することにし、もし反乱者側が拒否すれば、反乱者側に対して宣戦布告も辞さないとした。トリポリに到着したサーリムはユースフに面会した後、マンシア地区に赴いて反乱者側に船の返還を求めた。反乱者側はチュニ



ジアの要望を満たし、両者の紛争は回避された<sup>26)</sup>。

1834年10月、フサイン2世ベイは、マンシア地区の反乱者側から親書を受け取る。親書では、ユースフの後継者アリー・ベイに対する不満と甥のムハンマド・カラマンリーに対する支持の立場が記されるとともに、フサイン2世ベイに対してトリポリにおける困憊と分裂の状況をオスマン帝国政府に知らせてほしいと要望していた。ベイは、イスラーム法廷での審議を経た上で、チュニスを訪れていたオスマン帝国の使者シャーキル・エフェンディに親書を託した。そしてこの親書において、オスマン帝国に対し、トリポリの問題を解決するため、フサイン朝チュニジアがトリポリを併合するという提案を行うのである<sup>27)</sup>。

この提案は、シャーキル・サーヒブ・アッタービアの主導によるものであった。シャーキルは、イスラーム社会の分裂を避けるという名目で、フサイン2世ベイの弟ムスタファをトリポリのベイとして送り込み、事実上、フサイン朝がトリポリを併合することを構想していた<sup>28)</sup>。その後、同構想を受けたオスマン帝国の海軍大臣ターヒル・パシャは、フサイン2世ベイに対し、トリポリの紛争を終わらせるために必要な軍隊をチュニジアが派遣することやカラマンリー家の債務を肩代わりすることなどの条件を示したが<sup>29)</sup>、すでに見たとおり、最終的にオスマン帝国はフサイン朝の提案を採択せず、自ら艦隊を派遣してトリポリ直接統治の選択をするに至った。

1835年5月、オスマン帝国艦隊がトリポリに来航した日に前後して、チュニジアではムスタファがベイに即位した。ムスタファ1世ベイは、トリポリで反乱鎮圧にあたるターヒル・パシャに対し、1836年1月、使者ムスタファ・アガを派遣する。ムスタファ・アガは、ターヒル・パシャに贈り物を届けるとともに、ターヒル・パシャからの要求を受け取って3月にチュニスに戻る。ターヒル・パシャは、トリポリでの反乱鎮圧のため、ムスタファ1世ベイに対して船舶や軍馬を送るように求めたのである。ベイは準備にかかり、7月31日、3隻の軍船、9隻の借り受けた船、300頭の軍馬をムスタファ・アガに同行させて派遣した<sup>30)</sup>。先述のとおり、トリポリではその後、反乱は鎮圧された。

#### 4. オスマン帝国の脅威

その頃、チュニスではある不穏なうわさが流れていた。チュニジアが貢納を拒否したことに不満を持つオスマン帝国が、ターヒル・パシャ率いる艦隊をチュニジアに差し向けるといいうわさである。この情報を得たフランスは、オスマン帝国軍がチュニジアに展開することを危惧し、自国の艦隊をチュニスのゲー

レット港に派遣した<sup>31)</sup>。

一方、ムスタファ1世ベイは、大臣や高官を招集して会合を開催する。イブン・アビー・ディヤーフが伝える会合の内容は以下のとおりである<sup>32)</sup>。

会合の冒頭、ムスタファ1世ベイは、「(オスマン帝国の)海軍大臣が艦隊を率いてチュニスに來航すると知ったが、理由は承知していない。ただし、もし戦争を引き起こすためなのであれば、私はイスラーム教徒の血が自分のために流れるのを望まないし、自分の権威を流血と引き換えにしようとは思わない」と発言したという。これに対し、大臣スライマーン・カヒヤは、「この問題は個人的な問題ではありません。チュニジアは、ベイがチュニジアの権利と慣習を保護するからこそベイに対して忠誠の誓約をしているのです。忠誠の誓約はベイ個人に対してではありません。もしためらいによって麻痺しているのなら、戦いをためらわないフサイン家の後継者に道を譲るべきです。現状においてわれわれは平和と安全に暮らし、ベイの統治に満足しています。イスラームの内部で戦争を合法化するどんな罪をわれわれが犯したというのでしょうか」と厳しく指摘する。スライマーン・カヒヤは出席者のほうを振り向き、「何か言うことはあるか」と問うと、出席者は彼の意見に同意したという。続いて、息子のアフマドが、「もし、オスマン帝国に譲歩するならば、トリポリのように内戦に陥る危険が高いでしょう。というのも、チュニジアの遊牧民たちはトルコ人の権威を支持しないからです。そうなれば、流血を避けることはできません」と指摘した。ベイは、イスラームの内部で分裂を引き起こす者は厳しい罰を受けることになるかと反論するが、これに対し、イブン・アビー・ディヤーフは、「分裂を引き起こす者とは、ウンマ（イスラーム共同体）に対して戦争を引き起こす者であり、大部分の臣民が満足している政体に戦争を引き起こす者です。支配の正統性に関する宗教的な基盤は人びとの合意にこそあります」と述べた。アフマドは、「この内容が広まらないようにしなければなりません。もし遊牧民たちに伝われば、動揺や混乱を招くこととなります」と注意を促した。ベイは黙ったままであったが、シャーキル・サーヒブ・アッターピアは、「現在も将来も紛争に至らないようにするためには、オスマン帝国政府に対して外交を用いなければなりません。宗教的な理由なく、イスラーム教徒に対して戦争を仕掛ける権利がオスマン帝国にあるとは思えません。しかしながら、グレット港に現在投錨しているフランス艦隊の存在は、われわれの求めでそうしているという指摘を受けかねません。フランス領事に親書を送り、その印象を消し去ることが重要です」と述べた。

シャーキルの指摘に基づき、1836年9月23日、ベイからフランス領事に親書が送られる。親書では、フランスに対して、友好のために艦隊を派遣してい

ることに感謝を示しつつも、オスマン帝国艦隊の来航時にチュニスのゲーレット港にフランス艦隊が投錨していることは、チュニジアとオスマン帝国との間に問題を引き起こす可能性がある」と指摘し、この問題をフランス艦隊の司令官に伝達することを要望する内容であった<sup>33)</sup>。

ベイの親書に対するフランス領事からの回答は以下のとおりである<sup>34)</sup>。

領事は、まず、フランス政府が派遣したフランス艦隊をチュニジアが（ゲーレット港から）沖合へと移動をさせることはできないとし、それゆえに、フランス政府の決定に基づく艦隊の派遣に関して、オスマン帝国からチュニジアがどんな批判も受けることはない」と指摘した。その上で、フランス政府は、チュニジアとオスマン帝国の関係については理解しているとし、両者の関係を悪化させようとは考えておらず、現状維持を望んでいるとした。ただし、オスマン帝国がフランスの利益に害を与えるような試みをするのを見過ごすことはできないとし、ターヒル・パシャ率いるオスマン帝国艦隊がチュニスに来航するのを防ぐため、フランスはチュニスに艦隊を派遣したと説明した。また、フランス艦隊司令官は、ターヒル・パシャに対してオスマン帝国艦隊のチュニス来航は認められないとすでに通知したとし、その理由として、（フランスの支配に抵抗している）アルジェリアのコンスタンティーヌのベイ<sup>35)</sup>の決意を固めさせる恐れがあることを挙げた。そして、それでもオスマン帝国艦隊がチュニスに来航するのであれば、フランス艦隊は力づくでそれを防ぐと記している。

フランス領事からの回答を受けたムスタファ1世ベイは、トリポリのターヒル・パシャに使者を送り、その内容を伝達した。結局、オスマン帝国艦隊はチュニスに来航せず、カラマンリー朝に続くフサイン朝廃絶の危機は免れた<sup>36)</sup>。

## 5. カラマンリー朝凋落の要因

ここで、トリポリのカラマンリー朝の凋落に関して、イブン・アビー・ディヤーフがどのような要因を挙げているか確認しておこう<sup>37)</sup>。

まず、イブン・アビー・ディヤーフは、ユースフ・ベイがトリポリの臣民を軽視し、絶対的な権力の下、自らの享樂の出費を補うために過度な負担を臣民に強いたことを批判する。例えば、ユースフ・ベイがトリポリの艦船を売り払い、大砲を硬貨鑄造の素材とする一方、カラマンリー家の宮廷では自由な出費が続いたとし、そうしたことがカラマンリー朝と臣民を破滅に導いたと指摘する。また、ある時、トリポリのモスクの創設者でもある長老のムスタファ・クルジという人物がユースフに対して振る舞いを咎めたところ、クルジは処刑されたという事例をあげ、ユースフの独裁的な行動を伝えている。

さらに、イブン・アビー・ディヤーフは、カラマンリー朝凋落の要因として有識者が次の5つの点を挙げていると記している。第1が、政治的決定の結果を見通すことができない未熟な人物に政治を託したこと、第2が、不適切な構想を抱いたこと、第3が、税収が彼らの必要を満たす額には達していなかったこと、第4が、分別なく思い付きで側近を登用したり、遠ざけたりしたこと、第5が、良識や経験のある人物の助言を無視したことの5点である。

イブン・アビー・ディヤーフの指摘は、イギリスやフランスなど外国からの圧力に関する言及がないことを除けば、権力者の独善性を排することや財政の安定的管理に努めること、有能な人材を配置することなど、現代のわれわれから見てもいたって合理的な評価であるように思える。あらためて指摘するまでもないかもしれないが、適切な会計管理や合議制の重要さなどに対する意識は、近代ヨーロッパが持ち込んだものではなく、もともとチュニジアで根付き、19世紀中葉のチュニジアにおける立憲体制の構築にも一定の貢献をしたと考えられる<sup>38)</sup>。

## 6. 徴兵をめぐる混乱

トリポリでの政変後、チュニジアではニザーミ軍の拡充が試みられた。ニザーミ軍はフランス軍のアルジェ侵攻後に新設された常備軍である<sup>39)</sup>。

シャーキル・サーヒブ・アッタービアは、ニザーミ軍の中に黒人解放奴隷によって編成される新たな部隊の創設を目指し、ベイも承諾する。シャーキルはチュニス駐屯部隊長のサーリムに1000人規模の部隊の編成を命じた。ただし、詳細は示されておらず、命令を受けたサーリムは兵士たちに黒人を集めるように指示し、兵士たちはチュニジア内の農園や民家なども含めて黒人を拘束し、兵舎に連行するなど大きな混乱が生じた。中には、フランス領事に雇われていた使用人が外出中に拘束されたケースも含まれ、フランス領事からベイに対して抗議がなされる事態となった。ベイは、ただちに部隊創設の中止を命じた<sup>40)</sup>。

黒人解放奴隷部隊の創設の試みが混乱を招いただけの結果に終わり、今度は、チュニジア住民からの徴兵が模索される。ベイは、徴兵にあたり、まずは若者の人口調査を企図し、チュニスの町から取りかかることとした。チュニスと二つの市外地区のシャイフ（長）にすべての若者の名前を登録するように指示がなされ、それぞれのシャイフはさらに街区ごとのシャイフに指示を行った<sup>41)</sup>。

これに対し、住民からは大きな反発が起こる。イブン・アビー・ディヤーフは、ある住民の声として、「チュニスの住民は徴兵に応じない。その役割は、(従

来どおり)トルコ兵の子どもたちが担うべきだ。チュニジアでは出費がかさみ、収入が減少しているときに、大規模な軍隊がなぜ必要なのか。従軍すれば、その間生産的活動はできず、むしろ軍の維持費用がかかる。われわれはイスラーム教徒である。必要な時には全員が兵士になる」と伝えている。住民の一部は抗議のために集まり、その数は増えていった。彼らは、カーディー(イスラーム法廷裁判官)の元に赴き、アラブ人住民を徴兵するという従来慣習に反する政策には応じないとベイに伝えるように要望した。さらに彼らは、チュニス市内で直接ベイに対し、これまでの慣習を守るようにと抗議の声を上げた<sup>42)</sup>。

こうした事態に対し、ベイは親交のあるカーディーのアル=バフリを仲介役とするが、抗議者たちはベイ自身がダモスク(ザイトゥーナ・モスク)に来て面会に応じるように求めた。イブン・アビー・ディヤーフによれば、この要求にベイは応じる姿勢を見せたが、スライマーン・カヒヤは、そのようなことはふさわしくないとしてベイに面会を思いとどまらせ、抗議者のリーダーを逮捕し、集会を禁じるべきだと進言する。また、シャーキル・サーヒブ・アッタービヤは、「これは深刻な事態です。これまでチュニスでは決して起こらなかったことであり、彼らがなした厚かましさを見過ごすことはできません。私に兵士400人をお託ください。カスバに本拠を構え、私がケルアンの住民に支払わせた倍の額をチュニスの住民に支払わせてみせます。そうすれば、抗議をした人間もそれを見過ごした人間も等しく打撃を受けることとなります」と述べたという。ベイはこの発言に動揺し、「そのようなことをするくらいならば、私は死を選び、批判に身をさらすことを選択する」と述べ、強硬策を否定した。この後、ベイはシャイフたちによる若者の登録措置を取りやめるように指示をするとともに、抗議者たちに対して彼らの振る舞いを許すと伝えた<sup>43)</sup>。

結局、ムスタファ1世ベイの時代には、ニザーミ軍のための徴兵措置は進まず、次のアフマドの時代に課題は引き継がれることになった。

## 7. シャーキルの処刑

1837年夏、ムスタファ1世ベイは、自身の健康状態の悪化を懸念して、その年の夏の地方巡回軍の指揮をフサイン2世ベイの息子のムハンマドに命じ、アフマドにはチュニスに残るように指示をした。これに対し、アフマドはあくまで軍の指揮を執ることを要望し、その後、ベイは、それまで司令官がいなかったニザーミ軍についてアフマドに全権を委ねることにした<sup>44)</sup>。アフマドは、その後の自身の統治期も含め、ニザーミ軍の発展に力を注ぐことになる。

なお、アフマドは、宮廷政治において大きな力をふるうシャーキル・サーヒ

ブ・アッタービアに対して警戒感を持っていた。シャーキルは、フサイン2世ベイの寵臣として1820年代にオリブ油輸出問題などの対処にあたったマムルーク官僚で<sup>45)</sup>、フサイン2世ベイの娘を娶り、義理の親子関係にもあった。本稿で見てきたとおり、ムスタファ1世ベイの統治下でも、オスマン帝国への使者を務めるなど大きな役割を果たしてきた。

アフマドとシャーキルの対立は、フサイン2世ベイの統治期から芽生えていた。1830年、フランス軍がアルジェリアに侵攻すると、フサイン2世ベイは、フランスからの提案に基づき、アルジェリア内のコンスタンティーヌとオランにムスタファとアフマドを送り、フサイン朝が統治するという構想を進めた<sup>46)</sup>。この時、フサイン2世ベイの構想を強く支持したのがシャーキルであった。また、先述のとおり、1834年には、トリポリの混乱を収めるため、ムスタファをトリポリのベイとして派遣する構想をオスマン帝国に提案したが、その構想を進めた中心人物がシャーキルであった。いずれの構想においても、シャーキルには、チュニジアからムスタファやアフマドを排除することでフサイン2世ベイの二人の息子であるムハンマドとムハンマド・アッサディークをフサイン朝の後継者にしようとする狙いがあったとみられている<sup>47)</sup>。

そして、アフマドとシャーキルの対立が決定的となったのが、チュニジア南部の名家の出身で、特に商業・金融面でフサイン朝とのつながりを築いていたマフムード・ビン・アヤードを巡る問題であった<sup>48)</sup>。1837年夏、マフムードはフランス商人から借金の返済に迫られていたが、マフムードと親しい関係にあったアフマドは、ベイに対して、マフムードは宮廷に貸し付けをしており、チュニジアにとって重要な人物であるから、宮廷が借金を肩代わりすべきだと進言した。その総額は30万ピアストルに及んだ。この話を聞きつけたシャーキルは、ベイやマフムードらを含む側近たちの前で、マフムードが宮廷への貸し付けとしているのは贈り物として持ってきた品物の代金に過ぎないと主張した。これに対し、マフムードは、自発的でなく、命じられて持ってきたものは贈り物とは言えないと反論する。この回答にシャーキルは激高し、「ビン・アヤードの借金を全部払って、彼を私に引き渡せ」と叫んだという。ベイは、シャーキルの態度を理性的・宗教的に逸脱したものとしたため、マフムードの借金を返済するように命じた<sup>49)</sup>。

この事件の後、同じマムルーク官僚のムスタファ・サーヒブ・アッタービアは、シャーキルに対して振る舞いに気を付けるように進言したという。ムスタファは、「あなたのような立場の人は皆の前であのようなことをしてはいけません。中にはあなたを妬んでいる人がいて、そうした人たちはあなたの言ったことを誇張して誹謗中傷するのです。私たちの主人（フサイン家の人間）は私

たちに対する権利があります。なぜなら、彼らは私たちを子どものように買い受け、寵愛を与えて育て、彼らと家族ぐるみの付き合いをさせ、私たちに高い地位を与えているからです。私たちはいわば彼らの一部なのです。私たちが彼らに奉仕するのは役割だからであり、彼らに好意を抱いているからではありません。彼らの保護がなければ、私たちが享受するような対価を得ることも、栄誉において前進することもできないのです」<sup>50)</sup>と、シャーキルに対して述べたという。

ただし、1820年代のオリーブ油輸出問題の対処にあたって、宮廷の出費にも厳格さを要求したシャーキルにとって、マフムード・ビン・アヤードを巡る問題は到底認められるものではなかった<sup>51)</sup>。また、フサイン2世ベイとムスタファ1世ベイの統治期に、財政面のみならず、サヘル地域への影響力を増していたことも、シャーキルにとっては結果的に災いとなった。

シャーキルは、この事件の後、サヘル地域のスースに駐屯する軍の将校を呼び、何かあれば、シャーキルはフサイン2世ベイの息子のムハンマドとともに蜂起し、その際、サヘル地域の駐屯軍がシャーキルたちを守るという密約を交わした。また、ムハンマドが夏の地方巡回軍から戻るまで、時期を待つこととした。ところが、同密約に関し、サヘル地域の兵士の一人が後に反逆罪に問われることを恐れ、アフマドにこの陰謀を伝えるに至った。アフマドからシャーキルの陰謀を知らされたベイは、スライマーン・カヒヤとハイラディーン・カヒヤをマヌーバの宮殿に呼び寄せ、意見を求めた。二人は、ベイ自身そしてイスラーム教徒を脅かす危険を猶予なく取り除かねばならないと進言する。この後、ベイはシャーキルがバルドー宮に来たら拘留するようにアフマドに指示をする<sup>52)</sup>。

1837年9月12日、そのことを知らないまま、シャーキルはバルドー宮を訪れる。アフマドはシャーキルと謁見すると、その場で、ベイの命令により拘留すると伝えた。シャーキルは驚愕して転倒しそうになったという<sup>53)</sup>。

知らせを受けたベイは、マヌーバの宮殿から自ら馬にまたがり、バルドー宮へと急いだ。バルドー宮に到着すると、大臣や高官らを集め、シャーキルの計画について伝える。シャーキルの裁きに関して意見は割れたが、最終的な判断はベイに託された。ベイはアフマドにシャーキルの処刑を命じた。別室で拘束されていたシャーキルは怯えることなく、決定を聞き、そして、その場で絞殺された。翌日、ベイはシャーキルの遺体を手厚く埋葬したという<sup>54)</sup>。

その後、ベイは、シャーキルの陰謀に関わった将校をチュニアから追放し、また、シャーキルに近いカイド（知事）らの交代を命じた。なお、陰謀の共犯としてシャーキルに担がれたムハンマド自身は、計画について関知しておら

ず、地方巡回軍から戻った後もとがめられることはなかった<sup>55)</sup>。

## おわりに

1837年10月10日、首にできた腫瘍が悪化し、ムスタファ1世ベイは息を引き取った。イブン・アビー・ディヤーフは、シャーキルの処刑がベイに大きなショックを与え、病状を悪化させたという主治医の意見を伝えている<sup>56)</sup>。

ムスタファ1世ベイの統治期は、2年余りの短い期間ではあったが、オスマン帝国によるトリポリ直接統治の影響を受け、チュニジアにもその脅威が及んだ時期であった。結果的に、オスマン帝国からの軍事的圧力に対処するため、フランスへの依存がさらに進むことになった。

一方、チュニジア内では、軍事力の増強を目指してニザーミ軍の拡充が試行錯誤されたが、徴兵において混乱が生じたように常備軍を備えた近代国家への移行の難しさにも直面することになった。特に、トルコ系のフサイン家やマムルークらの支配者層にとってアラブ系の住民との関係は配慮が求められる要素であった。また、宮廷内では、シャーキル・サーヒブ・アッタービアの処刑によってベイに反旗を翻すことの危険性が再認識され、この後のアフマドの時代におけるベイの権力基盤の強化につながっていく。

ムスタファ1世ベイの統治期は、オスマン帝国によるトリポリ直接統治の影響を受け、結果的にフランスへの依存が進むとともにチュニジアにおける軍事力の増強が求められた時代であった。こうした条件を引き継ぎ、次のアフマド・ベイの時代に本格的な改革が始まることになる<sup>57)</sup>。

## 注

- 1) 19世紀初頭における「北アフリカ海賊」問題については、桃井治郎『「バルバリア海賊」の廃絶：ウィーン体制の光と影』風媒社、2015年を参照。ムスタファ1世ベイの前任者であるフサイン2世ベイの統治期については、同「フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期(1824-35)―フランス軍のアルジェ侵攻とチュニジアの経済危機」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第43号、2022年、176-194頁を参照。
- 2) これまで上記の論文を含め拙稿では、イブン・アビー・ディアフと表記してきたが、本稿では、アラビア語発音により近いイブン・アビー・ディヤーフという表記を用いる。同様の理由で、サキール・サヒブ・アル＝タビをシャーキル・サーヒブ・アッタービアに、ムハンマド・アル＝サディクをムハンマド・アッサディークに変更するなど人名表記の変更を行った。



- 3) イブン・アビー・ディヤーフとその歴史記述の評価については、桃井前掲論文を参照。
- 4) 筆者の知る限り、ムスタファ1世ベイの統治期に特化した研究は見当たらず、アブン＝ナスルのマグレブ通史やゲッルーズらのチュニジア近代史でも言及はわずかである。Jamil M. Abun-Nasr, *A History of the Mahrib*, 2nd ed., Cambridge University Press, 1975, p. 189; E. Guellouz, A. Masmoudi & M. Smida, *Histoire de la Tunisie, les temps modernes*, Société Tunisienne de Diffusion, 1983, pp. 317-318. ただし、同時期のイギリスの対チュニジア外交については、レイモンの研究が詳しい。André Raymond, *British Policy towards Tunis (1830-1881)*, Doctoral Dissertation: Oxford University, 1953, chs. 1-2. また、イブン・アビー・ディヤーフの歴史書『チュニジアの君主と基本協約の歴史 (Ithaf ahl al-zaman bi-ahbar muluk Tunis wa 'ahd al-aman)』では、第5章がムスタファ1世ベイの統治期についての記述である。同章については、レイモンによる仏訳があり、本稿はそれを用いる。Ahmad Ibn Abi L-Diyaf, *Chronique des rois de Tunis et du Pacte fondamental. Chapitres IV et V*, Tr. by André Raymond, IRMC-ISHMN ALIF: Tunis, 1994. その他では、トリポリ問題に関わるチュニジアの対応については、注16に示した文献に記述がある。邦語文献では、マグレブの通史を扱った宮治の著書がこの時代のチュニジアをめぐる国際環境などに言及している。宮治一雄『アフリカ現代史Ⅴ 北アフリカ』山川出版社、1978年。
- 5) L. Carl Brown, *The Tunisia of Ahmad Bey, 1837-1855*, Princeton University Press, 1974, pp. 38-39; Guellouz et autres, *op. cit.*, pp. 246-248.
- 6) Ibn Abi L-Diyaf, *op. cit.*, p. 61.
- 7) サーヒブ・アッタービヤ (Sahib al-Tabi') は、王璽長官 (master of the seal) を意味する。Kenneth J. Perkins, *Historical Dictionary of Tunisia*, 3rd ed., Rowman & Littlefield, 2016, p. 225.
- 8) マハッラ (mahalla) と呼ばれる地方巡回軍は、徴税とベイの統治の正統性を示すため、通常、夏に西部地域、冬に南部地域を巡回する部隊で、ベイの宮廷に協力的なマハザン (makhzan) 部族の部隊を加えて合計で4000人から8000人の規模となり、司令官は慣例的にベイの後継者が務めた。Brown, *op. cit.*, pp. 127-133.
- 9) ターヒル・パシヤのチュニスでの上陸拒否の経緯については、次を参照。桃井治郎「フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期 (1824-35)」。
- 10) Ibn Abi L-Diyaf, *op. cit.*, pp. 63-64.
- 11) *Ibid.*, pp. 64-65.
- 12) Abun-Nasr, *op. cit.*, pp. 193-196.
- 13) *Ibid.*, p. 196.
- 14) トリポリ戦争については、次を参照。桃井治郎『「バルバリア海賊」の廃絶：ウィーン体制の光と影』、第2章。
- 15) 「北アフリカ海賊」の廃絶をめぐる外交については、同書、第3章および第4章を参照。
- 16) Abun-Nasr, *op. cit.*, pp. 198-199.
- 17) *Ibid.*, p. 200.
- 18) Raymond, *op. cit.*, pp. 40-46; Erik de Lange, “The Congress System and the French Invasion of Algiers, 1827-1830”, *The Historical Journal*, Cambridge University Press,

Volume 64, Issue 4, 2021, pp. 940–962; İbrahim Kılıçaslan, *Ottoman Intervention in Tripoli (1835) and the Question of Ottoman Imperialism in the 19th Century*, Thesis: Sabancı University, 2019.

- 19) Abun-Nasr, *op. cit.*, p. 199.
- 20) *Ibid.*, pp. 199–200.
- 21) *Ibid.*, pp. 200–201; Kılıçaslan, *op. cit.*, pp. 59–62.
- 22) Abun-Nasr, *op. cit.*, p. 201; Kılıçaslan, *op. cit.*, pp. 66–67.
- 23) Abun-Nasr, *op. cit.*, p. 201.
- 24) かつてユースフがベイに即位する際に、フサイン朝が仲介を行った件を想定しているものと思われる。*Ibid.*, pp. 196–198.
- 25) Ibn Abi L-Diyaf, *op. cit.*, pp. 55–56.
- 26) *Ibid.*, p. 56.
- 27) *Ibid.*, pp. 56–57.
- 28) Abun-Nasr, *op. cit.*, p. 201; Kılıçaslan, *op. cit.*, p. 58; Ibn Abi L-Diyaf, *op. cit.*, p. 57.
- 29) Kılıçaslan, *op. cit.*, pp. 60–61; Raymond, *op. cit.*, pp. 53–54.
- 30) Ibn Abi L-Diyaf, *op. cit.*, pp. 69–70.
- 31) *Ibid.*, p. 70.
- 32) 会合の内容は、イブン・アビー・ディヤーフの記述に基づく。*Ibid.*, pp. 70–71.
- 33) *Ibid.*, pp. 71–72.
- 34) フランス領事の回答の内容については、次を参照。*Ibid.*, pp. 72–73.
- 35) アルジェリアのコンスタンティーヌのアフマド・ベイの抵抗については、さしあたり次を参照。桃井治郎「フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35）」。
- 36) Ibn Abi L-Diyaf, *op. cit.*, p. 72.
- 37) 以下のイブン・アビー・ディヤーフの記述は、次を参照。*Ibid.*, p. 68.
- 38) イブン・アビー・ディヤーフが歴史書『チュニジアの君主と基本協約の歴史』の執筆を始めたのは、晩年の1862年であり、カラマンリー朝凋落の要因の記述には、自らが仕えたアフマド1世ベイやムハンマド2世ベイ、ムハンマド・アッサディーク・ベイの時代の失政に対するイブン・アビー・ディヤーフ自身の批判的視点が重なっているように思える。なお、チュニジアにおける立憲体制の試みについては、次を参照。桃井治郎「19世紀のフサイン朝チュニジアにおける危機と改革（2）—立憲体制の成立と挫折」『清泉女子大学紀要』第70号、155–174頁。
- 39) ニザーミ軍については、次を参照。Brown, *op. cit.*, ch. 8.
- 40) Ibn Abi L-Diyaf, *op. cit.*, pp. 74–76.
- 41) *Ibid.*, p. 76.
- 42) *Ibid.*, pp. 76–77.
- 43) *Ibid.*, pp. 77–78.
- 44) *Ibid.*, p. 89.
- 45) 1820年代のオリーブ油輸出問題については以下を参照。桃井治郎「フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35）」および同「19世紀初頭のチュ

ニジア経済危機—対外貿易の変容と危機の増幅メカニズム』『アフリカ研究』（日本アフリカ学会）第67号、2005年、41-56頁。

- 46) アルジェリアのコンスタンティーンとオランのフサイン朝による統治の構想については、次を参照。桃井治郎「フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35）」。
- 47) Brown, *op. cit.*, pp. 214-215; Kılıçaslan, *op. cit.*, p. 58.
- 48) マフムード・ビン・アヤードは、アフマド・ベイの統治期にチュニジアの公営銀行の責任者に任命されるなどアフマドに重用されたが、1852年、チュニジアの宮廷財産を持ち逃げしてフランスに亡命した。その生涯については、次を参照。Mohamed Lazhar Gharbi, “Mahmoud Ben Ayyed: Le parcours transméditerranéen d’un homme d’affaires tunisien du milieu du xix<sup>e</sup> siècle”, *Méditerranée*, volume 124, 2015, pp. 21-27.
- 49) Ibn Abi L-Diyaf, *op. cit.*, p. 91.
- 50) *Ibid.*, pp. 91-92. なお、この時のムスタファとシャーキルの会話の場には、イブン・アビー・ディヤーフも同席していた。
- 51) イブン・アビー・ディヤーフは、マフムード・ビン・アヤードが借金返済のために宮廷から受け取った金額の半分をアフマドに贈ったというわさを伝えている。*Ibid.*, p. 92.
- 52) *Ibid.*, pp. 92-93.
- 53) *Ibid.*, p. 94.
- 54) *Ibid.*, pp. 95-96. なお、イブン・アビー・ディヤーフは、シャーキルについて、自分に与えられた権力に慢心を見せ、振る舞いにおいて政治的な慎重さを欠いたと指摘している。*Ibid.*, pp. 88-89.
- 55) *Ibid.*, p. 96.
- 56) *Ibid.*, p. 99.
- 57) ムスタファ1世ベイの後任者であるアフマド1世ベイの統治期については次を参照。桃井治郎「19世紀のフサイン朝チュニジアにおける危機と改革（1）—アフマド・ベイの統治と対外関係」『清泉女子大学紀要』第69号、2022年、67-83頁。